

開発途上国での保育による国際協力

——スリランカにおける

青年海外協力隊幼稚園教諭の活動——

前田 美知子

幼児教育の土地を耕す

平成元年、スリランカ最大の都市コロンボから九
〇キロのクルネガラに、青年海外協力隊の幼稚園教
諭上遠野節子^{かとおの}隊員が赴任した。彼女の所属は青年問
題雇用省国家青年活動評議会。無職の青年に職業訓

練をしたり、自立に必要な資金の貸付を行う所だっ
た。彼女の仕事は貧しい農村に点在する小さな幼稚
園の先生たちを対象に講習会や巡回指導を行うこと
であった。この先生たちも講習を受け、貸付金を元
に寺や公会所を借りて自分で幼稚園を開園している
人が多かった。仕事のない村の女性にとって、幼稚



▲農村の幼稚園を巡回指導する上遠野さん（平成元年）

園の先生という職業も収入を得るための手段に過ぎない場合も少なくなかった。

スリランカでは幼稚園を指導する官庁はなく国として一貫した幼児教育体系もない。個人、団体・組

合・寺などがそれぞれの目的・方法をもって独自に幼稚園を運営していた。

上遠野さんは早速講習を開いたり、農村の幼稚園巡回を開始する。幸い任地クルネガラの事務所長は「幼稚園」に理解と期待をもってくれる人で、上遠野さんのカウンターパート（協力者）として省の公務員でアーリヤラタさん（愛称をアーリイ）という優秀な女性を組ませてくれ、二人は一緒に活動することになった。

農村の園を巡回すると「白のお姉さんが来た」と泣き出す子どもがいたり、先生が棒を片手に子どもを教える場面に出合ったりした。

幼稚園は勉強の場であり、縁台式の机・椅子で文字や数字だけを教えている。勉強の切れ目に上遠野さんが簡単な手遊びや縄とびをして子どもたちと遊ぶと、子どもたちの笑顔も見られ、サリーの裾をたくし上げて縄とびをして見せる先生たちも見られるようになった。

巡回していくと以前訪れた園が廃園になっているに出合うことがあった。先生は転職、園児たちはどうなってしまったのだろう。農村は貧しい。収入のよい仕事に移らざるを得なかった先生を、豊かな国からやって来た協力隊員はどうする術もなかった。

講習会では廃材の集め方、それを使った製作、文字や数え方を面白く教える教材づくりなどの実技指導に、子どもの気持、接し方についてのケーススタディなどを加えていったところ先生たちの意識も少しずつ変わっていった。

カウンターパートのアーリイは役人であり幼児教育には知識や経験がない。考への食い違いもよくあったが日を重ねるうちに二人の気持の中にも大きな変化ができてきた。

アーリイは通信教育で幼児教育の勉強を始め、スリランカのためには教育に力を入れていかなければならない、教育の中でも幼児期の子どもの教育がど



▲貼絵の実技研修（平成4年）



▲「みて、みて！ 私の貼絵」意欲的になってきた先生たち

れほど大切であるか切々と述べるようになった。二人は巡回の道で夢を語り合うようになる。「グルネガラに村の先生たちが集まって勉強できる施設を作

りたいね」「モデル幼稚園や先生の養成コースができたらいいね」

上遠野さんは協力隊員としての二年間の任期終了を前に、アリーイを協力隊のカウンターパート研修の研修員（日本において十か月間研修する）として推薦した。本人も強く希望したが現実には厳しく日本側の受け入れ県がなかなかみつからない。あきらめかけた時、福島県の郡山女子大学短期大学部でアリーイを受け入れてくださることが決まった。

郡山女子大学では初めての開発途上国からの研修生として、聴講と付属幼稚園での実習をさせてくださることになった。関口はつ江先生（保育科主任教授・付属幼稚園長）はアリーイに「自分から学ぶことが大切です」と話され、彼女も意欲に燃えてひたすらに学んだ。

夏休みには、任期を終えて帰国し復職していた上遠野さんの勤務園（荒川区立東尾久保育園）で保育実習をさせていただいた。当時、開発途上国の大人

が保育現場に入ったのは始めてのことだったが、子どもたちは上遠野先生のお友達が出来たと喜んで遊んだ。アーリイもいまは「保育者」になっていたのだった。園長川崎登志江先生、保母さん、お母さんたちも国際理解と協力のよい機会になったと喜んで下さった。

「日本の幼児教育を学び、帰国したら、スリランカに合った幼児教育を考え、実現に向けてがんばります。スリランカにいた頃の上遠野さんの気持ちがわかります」とアーリイ。

二人が幼児教育を共有し合えたことが何より大きな喜びであり、国際協力となったのである。アーリイは日本での十か月間の研修を終えてスリランカに帰国した。

クルネガラでは、二代めの青年海外協力隊幼稚園教諭阿部純子隊員がアーリイを待っていた。彼女は郡山女子大学短期大学部の卒業生で、赴任前にアーリイとも話し合っていた。クルネガラに幼児教育の

土地は耕されている。平成四年春だった。

幼児教育の種子をまく

協力隊の活動に必要な要素がある。ボランティア精神・チャレンジ精神とそれを裏付ける仕事の専門的経験と知識・健康な心身・現地語を駆使する意欲・コミュニケーション能力・折衝力などである。

「スリランカの子どもや先生と話したり、遊んだりするのが楽しみ……」幼稚園教諭としての経験七年。アーリイとのコンビでシンハラ語の壁もクリアしながら勇んで巡回と講習に取り組んだ阿部さんだったが、次第に重い気持ちを抱くようになった。机に長時間しばりつけられる子どもたちの輝きを失った目。子どもの心を押さえつけている先生の姿を思うと胸が痛い。アーリイも焦りを感じている。

各園を巡り現場で先生・子どもたちを丁寧に指導

する草の根レベルの地道な活動に徹するのがよいの
だろうかとの思いもあった。だが、子どもたちのた
めには幼稚園の先生を育て、その先生たちが保育を
することが大切なのだ。

阿部さんは資料や情報を収集してみた。

スリランカ全体の幼稚園教育の実情は

1 幼稚園には教育体系の中の位置づけがない。教育
省その他の省庁の指導はない。

2 全国的に幼稚園が急増の中で、国の統計はない。

3 自由に幼稚園が設立され、施設や内容の格差が大
きい。

4 幼稚園教諭の資格・免許制度はない。

5 都市にプライベートの幼稚園教諭養成コースがい
くつかある。ただし実習はない。

6 職業訓練・現職研修の講習会が行われている。

7 幼稚園教育に対する関心は高まっている。

スリランカの幼稚園教育についての考察

1 一貫した教育体系がなく、幼児教育に関する正し

い知識を持たずに幼稚園を設立したり、指導に携
わる者が多い。

2 学校授業型の幼稚園（モデルは小学校）が多い。

3 教育内容は読・書・算の指導が主である。開発途
上国の多くは二つ以上の言語を使用している。生
活の貧しさ厳しさから読み書き計算を早くから身
につけさせることが必要とされている。貧しい中
で子どもの将来を考えると、親が望むのは必然と
思われる。しかしながら、幼児の発達を配慮した
指導の方法・教材はほとんど考えられていない。
4 大人の権威が重んぜられている。

日本の幼稚園教育もその普通って来た道である。

日本の現在の保育から考えると問題はかり見えて
しまう。スリランカの文化・習慣・社会的背景を十
分尊重した上での幼児教育を考え、それを実際に指
導し改善していくことが必要だ。

ア幼児期の「遊び」の大切さを伝えながらその中で

の文字・数の教育をバランスよく取り入れていかなければならない。その具体的な方法を示し、先生たちの考えも引き出していくことが大切である。

伊先生たちは歌・ゲーム・ダンス・造形など全てにおいて経験不足である。できないのではなく、経験したことがないので知らないだけ。従って先生が楽しんで行い、楽しいという経験をし、楽しいことを先生自身から子どもたちに伝えられるようにしていかねばならない。そして楽しさの中に含まれている意義も伝えられなければならぬ。そうでなければ経験不足故にただの遊びで終わってしまう。ひとつひとつ丁寧に理由を説明しながら、ケーススタディーを行うことによって、多くの経験を積むことが教師養成においては最も効果的なのである。

実は以前から青年問題スポーツ省からはモデル幼

稚園と幼稚園教諭養成センター設立を要請されていた。これは大きな要請である。阿部さんが日本にいたらこんな大きな課題と向き合うことがあったのだろうか。「果たして私に教諭養成センターなんてできるのだろうか?」「幼稚園の設立と運営?私に?」心の中でたじろぎの声もあった。しかし子どもたちが生き生きと遊び、先生が楽しそうに保育をする姿が心の中に浮かぶ。幼稚園教育の波及効果と将来を考えなければならぬ。「やろう。やってみよう。アーリーと」阿部さんの心は決まった。

平成四年、日本からも施設・設備の資料などを取り寄せ参考とし六月に設計図が完成。モデル幼稚園と教諭養成センターの用地をスリランカ側が用意し、山だった土地をたった五日間で整地してしまった(途上国として驚くほどのスピードで、熱意と期待が現れていた)。建物の資金は日・スで支出した。プロジェクトが決定されると大勢の人を巻き込んで複雑な仕事にひろがっていく。



▲「私たちのモデル幼稚園ができた」モデル幼稚園開園（平成6年）

省の担当者・設計者・施工の業者・地域の人々・日本側も現地JICA事務所や他の職種隊員の協力。人の輪がひろがり人間関係もふくらむ。保育の国際協力は大きなつながりとなり、建物となって立ち上がった。いった。

一方巡回指導と講習も続けていった。「お金がないから人形もボールも買えない、だから幼稚園をやっていかれないなんて弱音を上げないでいこうね」と話し、空箱や布で遊具を作ったりゲームをしたりという経験をさせる。新聞紙一枚で一年分の保育内容になるくらい多様なことを考えられる先生も育った。

モデル幼稚園設立に向け阿部さんは任期を一年半延長。幼稚園教諭佐野・井上両隊員を増員。そして指導者にアーリヤラタさんが就任した。モデル幼稚園の教員を募集したところ百名の応募があり四名を採用した。園運営・教育計画・学級指導の研修をしながら開園準備。園舎の壁画も皆の力で仕上げる。

平成六年四月、遂にモデル幼稚園サクラ・プレス
クールと幼稚園教諭養成センターが完成。

建物に子どもたちの声がひびく。タイヤの遊具に
挑戦する。雨上がりのドロンコ遊びが盛り上がる。
先生が育てば、子どもが育つ。養成センターに村の
先生たちが学びに来る。子どもを見て先生たちの目
が、意識が少しずつ開いていく。お母さんや地域の
大人・子どもたちも幼稚園に注目し、活用し協力的
になってくる。

スリランカに幼児教育の種子をまき、まだまだと
思っているうち芽が出始めたところである。

(青年海外協力隊幼児教育アドバイザー)

*

青年海外協力隊について

青年海外協力隊は国際協力事業団(JICA)が
実施する政府開発援助(ODA)事業の一つで、開

発途上国への技術ボランティア活動の支援を行って
おり、一六〇の職種がある。

隊員は現地の人々と同じ言葉で話し生活しなが
ら、開発途上国の新しい人造り・国造りに協力し、
人から人へ、心から心への技術移転と国際親善に励
んでいる。

幼児教育については昭和五十四年から、幼稚園教
諭一〇二名(内男性二名)、保母四十七名が、二十か
国で活動している。開発途上国では幼児教育のニー
ズが高まってはいるが、歴史が短く専門性が確立し
ていない。日本の保育者の経験と知識を役立て、途
上国の教師・保母を支援し幼児教育の道を広くして
いきたい。

問い合わせ先

青年海外協力隊事務局(国内第二課)

電話 〇三―三四〇〇―七二六一

〒150 東京都渋谷区広尾四―二―二四